

## 〔 病 ・ 虫 害 発 生 概 況 〕

## 〔 病 害 〕

## 麦 類 病 害

黄さび病は福岡、長崎、大分にわずかに発生がみられたにすぎなかった。黒さび病も並～少発生であったが、鹿児島では5月下旬～6月の高温、乾燥のためやや多発生であった。また赤さび病、小さび病の発生は少なかった。赤かび病は福岡、宮崎、鹿児島では初発生が早く、出穂期が高温、多雨であったためやや多く発生したが、他は並～少発生にとどまった。うどんこ病は長崎ではやや多発生であったが、一般には並～少発生であった。なおその他の病害として黄化萎縮病、大麦雲形病、から（稈）黒穂病、裸黒穂病などが多く発生したところもあった。

## 稲 病 害

葉いもち病は佐賀の山間山麓、長崎の五島、壱岐対島、県北部、宮崎の沿海地帯、高台、鹿児島などの早期又は早植栽培に発生が多く、普通栽培では大分の中山間部、平坦部の多肥田にまんえんをみたが、苗代期ならびに梅雨明けの高温、多照と防除が徹底したため一般に少発生であった。穂いもち病は熊本、宮崎、鹿児島の早期又は早植栽培ではやや早目の発生で、局部的に多発生であったが、普通栽培では8月中旬以降の干天のため少発生であった。紋枯病は早期栽培、山間高冷地に発生がやや多く、普通栽培では高温のため、多肥田など局部的に多発したが平年にくらべ少発生であった。白葉枯病は発生まんえん期の高温、乾燥と台風の来襲がなかったため、発生はさきわめて少なかったが、山間部の早植地帯の常発地に坪状の発生がみられたところがあった。ごま葉枯病は中南部九州に多発したところがあり、また今年では出穂期の8月下旬から9月上中旬が高温であったため、中北部九州ではとくにもみ（粃）枯細菌病が多発した。なお網斑病、小粒菌核病の発生は多い傾向であった。また苗代後期および本田初期に冠

水したところで黄化萎縮病の発生がみられ、その他苗腐病、馬鹿苗病も発生した。ウイルス病では、萎縮病は北部九州では並～少、中南部九州では多発生であった。縮葉枯病は一部山間山麓で多発したが、一般には並～少発生であった。また黄萎病は宮崎、鹿児島では発生がやや多い傾向であったが、中北部九州では少発生であった。黒すじ萎縮病の発生は少なかった。

## そ の 他 の 病 害

菜種菌核病は開花中の降雨が少なかったため発生は少なく、馬鈴薯疫病は春作では5～6月の少雨、多照、秋作では干ばつによる生育がおくれたため少発生であった。そ菜、果樹に多く発生した主な病害は、そ菜類灰色かび病、ウイルス病、トマト斑点細菌病、キュウリつる割病、菌核病、ナガイモ褐色腐敗病、イチゴうどんこ病、ナシ黒星病、カキうどんこ病、ブドウ褐斑病、カンキツ褐色腐敗病などであった。

## 〔 虫 害 〕

昭和42年度稲作害虫の特筆すべき発生はまず、九州全域、とくに北部九州一円におけるコブノメイガと、トビイロウンカの大発生である。局地的にはニカメイチュウの発生、南九州一円におけるツマグロヨコバイの常習的大発生と稲萎縮病の多発が問題となった。

まず、コブノメイガは昨年南九州においてかなり多発し、その対策もある程度確立していたが、本年は長崎県離島地方で7月中・下旬の第2回成虫期にかなり発生し、8月に入って第3回成虫期には北部九州一円で、例年になく多数の蛾の発生を見、そのピークは8月中旬にあたった。防除方法として、各成虫期のピーク時を目標として、その次のふ化幼虫をねらって各種の薬剤の散布が行なわれた。成虫の殺虫力はあまり明瞭ではなかったが、被害はよく抑

えた。一応の基準として、成虫期のピーク後10日以内に薬剤散布をして、ふ化幼虫を抑えるという結論を得た。

セジロウンカは平年発生の約2倍に達し、福岡、長崎、熊本、宮崎、鹿児島各地で異常飛来が見られ、7月下旬から8月上旬にかけて飛来成虫、第2世代幼虫の防除が行なわれた。

トビロウンカは昭和41年度につづいて各地で、6月下旬以降7月中旬にかけて初期の異常飛来が見られ、その後、早植地帯では8月下旬より坪枯れをおこすものも見られ、普通植では9月に入って、坪枯れが多く発生した。9月下旬以降坪枯れの進行につれて、農薬を多量に散布した地方もあったが、その効果は劣り各地で問題となった。これは干ばつや、稲の成熟に伴う、散布効果の低下によるものと考えられ、大発生年には更にその前の世代から、ウンカ

密度を抑制するよう、努力すべきであった。

ニカメイチュウ第2世代は局地的に多発生し、福岡などの調査ではマコモに多数寄生、越冬しているのがわかったが、これが次年度へ対してどのように影響するかは今後注意しなければならない。

ツマグロヨコバイは、鹿児島、宮崎において例年通り多発生し、とくに第2回成虫の発生が多く、早期6月前半、普通苗代における防除の必要性が強調された。これらは休閑田における越冬世代、第一世代の生存率、増殖率が高いことが原因と考えられた。また、ウイルスを保毒しているヨコバイの率も次第に増加しつつある。

ヒメトビウンカの発生は平年並であったが、北部九州では一部にしまはがれが多発生した地帯もあり、越冬世代の保毒虫率も高くなっていることがわかった。

